

一

次の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- ① タイボウの赤ちゃんが生まれた。
- ② 町のシセキを訪ねる。
- ③ 実力をハツキする。
- ④ 校舎の移転をスイシンする。
- ⑤ 国語の時間に教科書をロウドクした。
- ⑥ サイシンの注意を払う。
- ⑦ 教室に人のケハイがしない。
- ⑧ パソコンのソウサに詳しい。
- ⑨ 世界に向けて門戸を開く。
- ⑩ 筆舌につくしがたい風景。

二

次のことわざの空欄に適切なことばを入れ、その意味として最も適切なものを後の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 魚心あれば ①
- 2 ② の道も一歩から
- 3 飛んで火にいる ③
- 4 二階から ④
- 5 人のうわさも ⑤

ア じれったく思うようにいかず、もどかしいこと。

イ 愚かにも自分から進んで危険や災難にかかわっていくこと。

ウ 相手の出方しだいでこちらの対応の仕方も違ってくること。

エ 世間の評判は長続きしないこと。

オ どんな大きな事柄であっても、まず手近なことから始めなければならないこと。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部を省略した箇所があります。また、字数制限のある問題では句読点も字数に含むものとします。

ああ、君、そんな考えは
捨てなくちゃいけません！

チエーホフ

これは、チエーホフが、ある短い小説の中で、中年の技師に言わせているセリフです。①「そんな考え」とは、どんな考えなのでしょう。

その技師は、彼の描写によると、肩幅の広い、体格のがっしりした男で、若くもなければ年寄りでもなく、うまいものを好み、酒を飲み、過去をほめ、歩くときには軽く息を切らし、眠れば大きないびきをかき、若い者に対しては、無意識に、「ねえ、君」という調子で、恩恵^{おんけい}でも施すような親しみを見せ、若者の考え方に対して優しく戒める^{いまし}のを自分の権利のように感じている、そういう年輩の人物です。

そして、この男に戒められているのは、日焼けした、やや、ねこ背の学生で、心持ち皮肉な、物思わしげな顔つきと、いくらか上目づかいにも見える目つきと、全体の姿勢とが、心の沈滞と脳髓の怠惰とを現わしている、そういう若者、つまり、^②兩人とも百年まえのロシアならずと、どこにでもいそうな人間です。じつさい、こうした中年と、こうした青年なら、現代の日本でも、ちよつと町を歩けば、いたるところで見受けることができます。

しかし、その会話となると、そうさらにきけそうにありません。たしかに、この中年の技師は、^③わけ知り顔でその学生に対して忠告をしているのですが、そして、相手の学生は、反抗的、というより軽蔑的なまなざしできているのですが、技師の説得には、きわめて重要な意見が盛られているように思われるからです。

たしかに、この作品の中で、チエーホフがこの技師に言わせていることばは、考えてみるのに、じゅうぶん値する内容を持っている

ように思います。

あるいは、すでにお読みになったかもしれません。『灯火』と題されたごく短い、ほんの三十分もあれば読み終えてしまうチェーホフの作品です。^④

主人公の「私」は、八月のある夜、馬で草原を横切つて帰る途中、暗がり道に迷つてしまい、草原のただなかにポツンと灯のついた仮設小屋の戸をたたいて、そこに泊めてもらうことになりました。

それは鉄道敷設工事のために造られたバラックで、「私」は、親切な技師アナーニエフと、彼の助手の学生シユテンベルグに迎えられ、そこでふたりのやりとりをきかされることになるのです。

八月の、星は多いが、まっくらな晩でした。都会から遠くはなれた荒涼とした大地、その果てしない大地の向こうに、ポツンと、べつのバラックの灯がまたたいており、さらに向こうに、もうひとつの灯が光っていて、それから先は夜の闇の中に消えていきました。

遙かな灯火をながめながら、技師アナーニエフは感に耐えない声で、シユテンベルグに向かって、こう言います。

「どうだね、すばらしいじゃないか。われわれはいま、こうやって鉄道を敷設している。少し前までは荒野だった場所に、いまでは生活があり、文明がある。そして、われわれの死後、百年とか二百年とかのうちに、他の人たちがここに工場や病院を建てるだろう。すばらしいことだと思わないかね」

だが、シユテンベルグはポケットに両手をつ込んだまま、返事をしません。^⑥

そして長い沈黙のあと、彼は「私」のほうを振り向いて、こうつぶやくのです。

「ぼくたちは鉄道を敷設しています。が、二千年も過ぎようものなら……あとかたも残らんでしょうよ。いつか、この世にアマレク人だのフィリスチン人だのがいて、戦争をしたり、それぞれの役割を演じたりしていましたが、いまでは影も形もなくなっているじゃありませんか。ぼくらだって同じことですよ」《A》

「ああ、君、そんな考えは捨てなくっちゃいけません！」と、技師アナーニエフは、ここで叫びます。そして、つぎのように諭すのです。^⑦

「そうした虚無とか、無常とか、生の無意義だとかいうような考えは、人が」^⑦ になって、それが長い間の労働や苦悶の結実とし

て現われてこそ、結構でもあり自然でもあり、また知的財産ともなるのだが、君のように、まだやっと独立の生活をはじめたばかりの若い脳髓にとつては、そうした思想は禍いだ。禍いですよ！」

だが、傍らに立っている学生シユテンベルグは、肩をすくめて、つぶやきます。

「若い者にとっては有害だけど、老人にとっては正常だなんて、そんな老人の特権は、いったいどこからくるんです？ もし、こうした思想が有害だとすれば、それは万人にとって一様に有害なはずじゃありませんか」

「いや、そうじゃない」と、アナーニエフは躍起になって青年に説きます。《B》

「老人の厭世主義は、外部からひよっこりやつてくるのではなく、自分自身の頭脳の奥深いところからくるのだ。さんざん苦しみ、数えきれないほどのあやまちをしでかしたあと、^⑧ 下から上までの全階段をのぼり終わったときに、はじめてやつてくるのだ。そのあげくの虚無主義ならわかる。だが……」

人生の門出に立っている青年が、一足飛びに、「どうせ、ぼくらは死んでしまうのだ、跡形もなくなっちゃうのだ、だから人生なんてものは……」というぐあい考えたなら、もう、そこから何も出てこないではないか、と言うのです。青年は何よりもまず、一段、一段、人生の梯子をのぼっていかねばならない、と。

《C》このようなアナーニエフのお説教は、中年の男の、いかにもしたり顔な意見のようにきこえるかもしれません。

人生とは、君が考えるようなもんじゃない、^⑨ したすえ、年月という苦いクスリを飲みつつけて、はじめてわかるものなんだ、といったふうの説教は、若者のだれもが一度は耳にしたことのあることばでしょう。

だから、多くの若者たちは、そう言われると、肩をすくめて、「ほら、またはじまった」というくらいの反応しか示しません。^⑩ シユテンベルグもそうでした。

しかし、アナーニエフが言いたかったのは、もう少し、だいじなことだったのです。それは、敷衍して言うなら、「結論そのものより、そこへ至る過程こそがたいせつなのだ」ということです。そして、こうした考えは、とかく結論だけを性急に求めがちな多くの若者にとって、きわめて重要な命題だと言わねばなりません。

私は、チェーホフのこの短編を読みかえしながら、この作品が、現代の日本の若者のために書かれたのではないか、という錯覚さえ

覚えます。《D》アナ―ニエフは、まるでいまの日本人の、ものの考え方^⑪に、貴重な一矢を放っているかのように思えてならないので

考えてみると、いまの私たちの生活は結論だらけです。かつては長い時間をかけた熟慮のすえ、やっと手にした結論が、今日では、実に簡単に、あまりにもあっけなく、手にはいります。コンピュータは、あつという間に性格診断までやってのけ、結婚の相手の性格まではじき出してくれているではありませんか。テレビのクイズ番組をごらんなさい。解答は数秒のうちになされねばなりません。問と答のあいだには、反射作用しかないのです。そして、その成績もたちまち決まり、賞金はその場で手渡されます。クイズ番組にかぎりません。どんな複雑な、熟考を要する問題でも、テレビカメラの前に立たされた論者は、即座に結論を言われます。その結論が、どのような思考の過程を経て、どのような熟慮のすえ出されたか、などということは、この際どうでもいいのです。「要するに結論はどうなんだ、結論は」と、言うわけです。

大学の講義にしても、一年もかけてノートをとるなんて愚の骨頂です。授業なんてものは交替に出て一冊のノートをつくり、それを写せばじゅうぶんだ。しかも、そのノートさえわざわざ自分の手で書き写す必要はありません。複写機にかければ、何冊のノートでも、たちどころに複製されるのです。食物に至っては、もう言うまでもありますまい。インスタント化される品目は、つぎつぎにひろがっています。インスタントみそ汁をはじめ、何から何まで用意されています。《E》

インスタント食品のどこが悪い、と言うかもしれません。べつに悪くはありません。出来あがり、味もさして違わぬ食品ならば、なにも、わざわざ手間ひまをかけて作る必要はないでしょう。けれど、このように、すべてがインスタント化されていくと、いつの間にか、過程というものの重さが失われてしまいます。食べ物、それを味わい、それを味わってもらいたいと思う人が、時間と手間をかけてつくる、という過程を経たものではなく、すでに、そこにつくられてあるものになってしまったのですから。こうして、一切が片っ端から過程抜きになってしまいました。

このような状況の中で、人びとが、つい、ものごとの過程というものを見捨てるようになってしまふのは、きわめて当然のことでしょう。

う。一瞬のうちに食品があたためられて目の前に出てくる電子レンジの時代に、いったい、だれが、手間ひまかけて煮たきするという過程に関心を払うでしょうか。

《F》しかし、思考というものは、そして、さまざまな想念の中で生きていく人生そのものは、インスタント食品ではありません。まったく逆のものです。ここでは、結果よりも過程こそが、その本質をなしています。いや、むしろ、結果のほうが副次的ふくじてきというべきでしょう。

《G》どうせ、人間は老いを迎え、やがて死ぬのです。財力や地位といったものが手にはいったところで、死という結末に照らしてみたら、そんなものが何になるというでしょう。だから、その結末だけを性急にとりだし、結末に至る過程を無視して人生を考えるなら、人生そのものは、ないにひとしくなってしまう。

しかし、結末はそうであっても、その過程こそが人生なのです。思想とか人生とかは、言うなら、「過程」の別称にほかなりません。技師アーニエフが説いているのは、たとえ、人生の終点に立つて、ああ、ぼくの一生はむなしかった、という虚無感にさいなまれても、その人の一生は、何ものにもかえがたい人生なのだ、なぜなら、人生とは過程そのものにほかならないからだ、ということなのです。そして、こう考えてこそ、人生は不条理な、徒勞とらうの情熱にすぎないにしても、なんと豊かな、味わい深いものになることか、というのです。

《H》もういちどアナ―ニエフのことに耳を傾けてみましょう。彼は荒野のブラック小屋でシュテンベルグに説きつづけます。あたかも自分自身に言い聞かせるように。

「いいかね。もしわれわれが下のほうの階段の助けを借りずに一足飛びに最上段へ躍りあがる方法を見つけたら、その長い全階段はわれわれにとって、一切の意味を失うことになる。^⑫ こういう不幸な考え方には、なんの進歩も、学問も、芸術も、思想そのものすらありえないということを知らねばならないのだよ」

問一 ― 線①「『そんな考え』とは、どんな考えなのでしょう」とありますが、「そんな考え」の内容を文章中から二十五字で抜き出さない。

問二 ― 線②「兩人とも百年まえのロシアならずと、どこにでもいそうな人間です」とありますが、作者がこのように書くのはなぜだと考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 話の場面が、必ずしもロシアらしくないかもしれないという気持ちがあるから。
イ 話の時代が、百年前のロシアだと読者に意識しておいて欲しい気持ちがあるから。
ウ 話の主題が、どこでも、だれにでも当てはまることだという気持ちがあるから。
エ 話の内容が、当時の読者に当てはまらないかもしれないという気持ちがあるから。
オ 話の結末が、ありふれたものだったので、がっかりしたという気持ちがあるから。

問三 ― 線③「わけ知り顔で」とありますが、人物のどのような様子をいいますか。「わけ知り顔」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア ものごとの事情をよく知っているようす
イ 相手の気持ちをよく考えているようす
ウ 自分のことだけしか考えていないようす
エ 他人の秘密をよく知っているようす
オ うわさ話をすっかり信じているようす

問四 ― 線④「チェーホフの作品」とありますが、チェーホフはロシアの作家です。ロシアの作品（ロシア人の作家が書いた、または、ロシアの民話）を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人魚姫 イ リア王 ウ 赤毛のアン エ 白雪姫 オ 大きなかぶ

問五 ― 線⑤「感に耐えない声で」とありますが、人物のどのような様子をいいますか。「感に耐えない声で」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 深く感動しているようす
イ ひどく恐れているようす
ウ いらいらしているようす
エ 大変あせっているようす
オ 大声で泣いているようす

問六 ― 線⑥「返事をしません」とありますが、なぜシュテンベルグは返事をしないのですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アナーニエフが自分をばかにしていると思い込んで、シュテンベルグは反発する気持ちしかもてないでいるから。
イ アナーニエフの言い方が押しつけがましいので、言っていることは正しいと思うのに、賛成できないでいるから。
ウ シュテンベルグが悩んでいることも知らず、アナーニエフが陽気に未来のことを語っていることが許せないから。
エ アナーニエフの言いたいことは確かに分かるが、シュテンベルグは結果を想像するとむなしくなるから。
オ シュテンベルグに対して、いつでもアナーニエフが一方的に教えたことが不満で、仕方なかったから。

問七 空欄 ⑦ に入る最もふさわしい言葉を、このあとの文章中から漢字二字で抜き出さない。

問八 ―線⑧「下から上までの全階段をのぼり終わったとき」とありますが、この文章では、どのような時のことを表していますか。
八字以内で答えなさい。

問九 空欄 ⑨ に入る最もふさわしい言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 一念発起 イ 以心伝心 ウ 自画自賛 エ 心機一転 オ 意気投合 カ 悪戦苦闘

問十 ―線⑩「シユテンベルグもそうでした」とありますが、シユテンベルグが、どのような態度をとったということですか。二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問十一 ―線⑪「いまの日本人の、ものの考え方」とありますが、作者が心配している「いまの日本人」のようすを文章中から十五字で抜き出さない。

問十二 文章中の 〇 で囲んだ部分のような世の中になってしまふことによつて、どんな困ったことになってしまふと作者は書いていますか。どんな困ったことになつてしまふかを、文中の言葉を使つて二十五字以内で答えなさい。

問十三 次の一文は、文中の《A》、《H》の中から抜き出したものです。どこに入れるのがよいですか。最もふさわしい箇所を一つ選び、記号で答えなさい。

結果というなら、人生の結果など、だれにもわかつています。

問十四 ―線⑫「こういう不幸な考え方」とありますが、どういう考え方を「不幸な考え方」というのですか。次の文の空欄（ア）（イ）にあてはまる言葉を文章中から抜き出して、文を完成させなさい。

（ア） だけを求めて（イ）を軽んずる考え方

問十五 この文章に題名をつけるとしたら、次の中でどれが最もよいですか。一つ選び、記号で答えなさい。

ア 技師の会話について
イ 人生について
ウ チェーホフについて
エ ロシアと日本について
オ 鉄道敷設について
カ 未来について
キ 現代日本について